



阿波和紙職人

藤森 洋一さん

大学開放実践センター・教授（職業能力開発） **もり森** **かず和** **お夫**

今年の5月、大学開放実践センターで「職人に学ぶ 技の伝承と文化」という衛星通信テレビ公開講座を開催した。この時に、受講した方々から職人の方を訪ねたいという話があった。私は受講生3人（奈須アサ子さん、伊東宏さん、逢坂光代さん）と共に訪問することにした。徳島県中央部の山川町に向かった。お訪ねした藤森さんは富士製紙の経営者であり、阿波和紙職人である。1時間半のインタビューと工場見学を終えた頃、激しい雨が落ちてきた。阿波和紙への想いと藤森さんの活躍への期待とが入り混じった帰路となった。

* 訪問先のインターネットホームページ
<http://www.awagami.or.jp/>

阿波和紙伝統産業会館

情報発信

冒頭、藤森さんは「紙漉職人のイメージはどうですか」と話し掛けた。「皆さんが固定観念を持つと職人たちは変われないのです」という。今、職人たちが新しい時代に生きようとしている時、それを阻むものがないように願う。昔は、産地に問屋さんがあって、消費地に情報発信をしていたし、消費者情報をも収集していた。しかし、現在はそうではなくなったという。現在は直接、生産者が情報発信をしなければならぬ。このような情報戦略が極めて

重要になってきているのである。マーケットに物が無いということは干上がった状態に等しく、世の中から忘れられてしまう存在になる。私たちの暮らしの中にある和紙は障子、襖、照明器具などである。また、版画用紙、書道用紙などにも使用される。このような時代に和紙職人とはいったい何であるのか。

商品開発と職人技

かつて、「紙漉職人」と呼ばれていたように和紙製造の一工程の名称が使われていた。しかし、現在は他工程はもとより、ソフトの部分、つまり商品企画まで職人の創作がないと生きていけなくなつたのである。人間が生活の中で和紙をどう使うかを考えていかないと和紙製造は出来ない。また、これからの時代は和紙職人が例えば建築家やデザイナーのような方々と共同して仕事をしないとできない。それは和紙をマーケットにイングして、生活の中に位置づかせるためである。美術品や必需品ではないが人に安らぎを与える商品として出していけるのである。和紙には人の暮らしを楽しくする魅力がある。藤森さんの会社ではブランドで売ることを大切にしている。今は二次加工企業と協力して提供する。単に素材だけを提供する時代は終わったと言つてよい。

現在、藤森さんが提案している和

紙の中心は壁紙である。工場以外からさまざまな方々に参画してもらつて、商品開発すれば、売れるもの、使われるものができるし、社員にもつく。ニーズさえつかめれば商品開発はできるのだ。

最近和紙に対する数字的な管理が求められてきており、このための試験機器を導入している。ここでも、新しい時代の職人へと脱皮が求められている。

生き方、そして夢

職人技が求められる工程は①原料を処理する、②紙を漉く、③乾燥する、④裁断する、⑤検査するの5工程である。工程ごとに熟練仕事が入っている。また、和紙の生産は多品種少量生産の典型的なもので、臨機応変の段取りが求められる。技の伝承は取り組みとして考えていかなければならないのである。インタビューの中で「和紙づくりの意味」は何ですかと質問したところ、「天然繊維の持つ力の強さとその素晴らしさを紙に残すこと」と答えられたのが印象的であった。現在、藤森さんは新宿や銀座での製品展示会を企画実施している。また、ヨーロッパ、アメリカでの「手漉き和紙ワークショップ」に出かけるそうである。阿波和紙が世界の人々の暮らしに根づくことを期待せずにはいられない。